

成人看護学実習 I（急性期回復期の看護）

I. 目的

成人の急性期から回復期にある対象の特徴を理解し、生命の維持・健康の回復へ向けた援助ができる基礎的能力を養う。

II. 目標

1. 生命の危機的状態から回復に向かう成人期の対象を、身体的・精神的・社会的側面から総合的に理解できる。
2. 手術療法に伴う身体侵襲を予測し、術後合併症予防のための援助ができる。
3. 術後の回復を促進するための援助及び社会復帰への援助ができる。

III. 実習時期

2 年次後期～3 年次後期

IV. 実習場所

岡山医療センター：7A・7B・10A *手術室、5A（回復室）を含む

V. 行動目標および学習内容

実習目標	行動目標	学習内容
1. 生命の危機的状態から回復に向かう成人期の対象を、身体的・精神的・社会的側面から総合的に理解できる。	<ol style="list-style-type: none"> 1) 疾病と手術による影響をふまえて、身体的側面が述べられる。 2) 疾病と手術による影響をふまえて、精神的側面が述べられる。 3) 疾病と手術による影響をふまえて、社会的側面が述べられる。 	<p>治療方針、手術の目的、術式、麻酔の種類、予後、手術侵襲と生体反応、手術による機能低下・喪失、日常生活への影響</p> <p>疾患・手術の説明内容と受け止め方、手術の意思決定、術前・術後の不安とその要因、病名告知に対する対象及び家族の葛藤、危機モデル</p> <p>役割関係(家族内役割、職場での役割、地域での役割)、経済的問題</p>
2. 手術療法に伴う身体侵襲を予測し、術後合併症予防のための援助ができる。	<ol style="list-style-type: none"> 1) 予測される術後合併症についてアセスメントできる。 2) 術前オリエンテーション及び術前処置の必要性が述べられる。 3) 異常の早期発見のための観察ができる。 	<p>手術による生体侵襲、麻酔(全身麻酔、局所麻酔)による影響、手術中の体位による影響、術前検査、生活習慣・既往歴が術後に及ぼす影響</p> <p>術前オリエンテーション、術前指導、術前処置(除毛、臍処置)、前投薬</p> <p>意識レベル、呼吸・循環・体温、疼痛、創部の状態、神経症状、消化器症状、水分出納バランス、血栓塞栓症、出血</p>

実習目標	行動目標	学習内容
	<p>4) 術後の経過に応じて、得られた情報の正常・異常が判断できる。</p> <p>5) 術後疼痛を緩和するための援助ができる。</p> <p>6) 対象の状態に応じた早期離床のための援助ができる。</p> <p>7) 創傷処置・ドレナージ管理の援助ができる。</p> <p>8) 周手術期における治療に伴う援助について述べられる。</p>	<p>Moore の術後回復過程、創傷治癒過程、正常・異常の判断</p> <p>術後疼痛が生体に及ぼす影響</p> <p>術後先制鎮痛、持続硬膜外注入法、創保護、安楽な体位の工夫</p> <p>早期離床の意義と看護、深呼吸、咳嗽、含嗽、吸入、弾性ストッキングの装着、間欠的空気圧迫法、状態に応じた段階的な離床</p> <p>創傷処置、創傷管理、ドレナージの管理、膀胱留置カテーテルの管理、滅菌操作</p> <p>酸素療法時の看護、輸液療法時の看護、輸血療法時の看護</p>
<p>3. 術後の回復を促進するための援助及び社会復帰への援助が実施できる。</p>	<p>1) 回復を促すための日常生活自立への援助ができる。</p> <p>2) 対象に必要な社会復帰に向けた援助が述べられる。</p> <p>3) 不安を軽減するための援助ができる。</p>	<p>回復段階に応じた日常生活援助、回復段階に応じたリハビリテーション、代償機能の獲得、ADL の拡大</p> <p>術式に応じた日常生活への適応(消化器手術に伴う影響を考慮、禁忌肢位を考慮)、社会資源の活用、患者会、退院調整活動</p> <p>ボディイメージの変化や機能障害の受容への援助、喪失体験に対する悲嘆ケア、家族の精神面へ配慮した看護、退院指導</p>